

特殊報第2号

各関係機関団体の長  
各病害虫防除員  
農業資材販売等関係者 } 殿

福岡県病害虫防除所長

平成21年度病害虫発生予察特殊報第2号について

このことについて、病害虫発生予察特殊報第2号を発表したので送付します。

ニラ

1 病害虫名 ニラえそ条斑病

2 病原ウイルス名 Iris yellow spot virus: IYSV

3 特殊報の内容

(1) 初発生確認の経緯

平成21年7月下旬、久留米市内の施設栽培ニラにおいて、葉身に淡黄色から白色のえそ斑点や大型のえそ条斑を生じる症状が確認された。当防除所で、DAS-ELISA法によりウイルス検定を行った結果、IYSVが検出されニラえそ条斑病であることが判明した。

本ウイルスによる病害は、平成8年に千葉県のアストロメリアで初確認されており、ニラでは平成15年に高知県で初めて確認され、その後栃木県、群馬県、大分県及び茨城県でも確認されている。

本県では平成15年にトルコギキョウで発生が確認され、同年に特殊報を発表している。

(2) 病徴

初期病徴は、葉身に小型の退緑斑を生じ、その後淡黄色から白色のえそ斑点や大型のえそ条斑を生じる(図1)。病斑の大きさは、数mm~10mm程度である。

(3) 発生生態

本ウイルスはトスポウイルスに属し、ネギアザミウマによって媒介される。ネギアザミウマは、幼虫時に感染植物を吸汁することによって本ウイルスを獲得し、終生ウイルスを伝搬(永続伝搬)するが、経卵伝染はしない。なお、本種以外のアザミウマによる伝搬は確認されていない。

また、土壌伝染、種子伝染はしない。管理作業による汁液伝染の可能性は低いとされている。

(4) 宿主植物

現在までに、18科40種以上の植物で、感染が報告されている(表1)。

表1 IYSVの感染が報告されている植物

科名	植物名
リンドウ科	トルコギキョウ
ユリ科	ネギ、タマネギ、ニラ、ラッキョウ、ニンニク、テッポウユリ、リーキ、バルビネ、ジャノヒゲ、オオバジャノヒゲ
アルストロメリア科	アルストロメリア
ヒガンバナ科	アマリリス、ユーチャリス、クンシラン、スイセン
アヤメ科	ダッチアイリス
ヒユ科	センニチコウ
アカザ科	ハウレンソウ
アブラナ科	ダイコン、ハクサイ、ブロッコリー、ミズナ、イヌガラシ、スカシタゴボウ、タネツケバナ、ナズナ
セリ科	ニンジン
キク科	チチコグサモドキ、ノボロギク
ゴマノハグサ科	オオイヌノフグリ、トキワハゼ
シソ科	ホトケノザ
スベリヒユ科	スベリヒユ
スミレ科	パンジー
ナデシコ科	コハコベ、オランダミミナグサ、ノミノフスマ
マメ科	ヤハズエンドウ
ナス科	<i>Nicotiana benthamiana</i> , <i>N.rustica</i> , <i>N.glutinosa</i>

(5) 媒介虫(ネギアザミウマ)の特徴

体長は1.1~1.6mm、体色は黄色~褐色で、一般に夏季は淡色、冬季は暗色の個体が多い。極地方を除く全世界に広く分布している。ネギやニラなどユリ科植物の害虫として問題となるが、アブラナ科、ナス科、マメ科、キク科等、広範囲な植物で寄生が確認されている。卵から羽化までの発育期間は20℃で20日、25℃では16~17日、成虫の生存期間は21~47日である。西日本の野外では3月頃から増殖を開始し、6~8月に最盛期を迎え、9月以降密度が減少する。ネギ等の栽培作物やノビル等の雑草において越冬する。

(6) 防除対策

- ア 本ウイルスを媒介するネギアザミウマの防除を徹底する。
- イ 雑草は、本虫の発生源となるので、施設内外の除草を徹底する。
- ウ 施設栽培の場合は、紫外線カットフィルムで被覆するとともに、施設開口部に防虫ネットを張り、本種の侵入を防止する。
- エ 発病株は早期に抜き取り、ほ場外へ持ち出すとともに埋没等の処分を行う。
- オ 栽培終了後はハウスの蒸し込みを行い、ハウス外への本虫の飛び出しを防止する。



写真1 ニラえそ条班病の症状

写真2 媒介虫ネギアザミウマ